

親鸞とルター-一向一揆とドイツ農民戦争-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学社会科学研究所 公開日: 2013-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉塚, 平 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/15372

今世紀最大のキリスト教神学者カール・バルトは、「源空（＝法然）は、積善の功あるもろもろの善行の可能性を必しも否定しなかったのであるが、親鸞によればその可能性は全くなく、すべてはひたむきな信仰によるのである。生死の輪廻からの何らかの自力の行為によって解脱しうるには、我々は深く肉の諸欲にしばられすぎている。人間がすべきこと、なしうることは、人間の側からのいかなる行為もなしに、ただ弥陀の側から廻施された救いへの感謝以外にはありえないのである」と語り、仏教とキリスト教の本来的な差異があるのもかかわらず、親鸞の信仰観はルターのそれと驚くほどの相似性をもっている、それはまさしく神の不可知なる摂理の賜であるとすらいうのである。

実際、早くから親鸞の思想とプロテスタンチズムのある種の思想的共通性が指摘されてきた。明治初期横浜にやってきたドイツ福音派宣教師たちは、真宗の思想を発見して狂喜し、学習会を開いては、その研究をドイツに送りつづけていた。これらの資料を基にして、マックス、ウェーバーも『ヒンズー教と仏教』の中で次のように語っている。「13世紀初頭に開基された真宗は、少なくとも一切の自力行為を神聖化することを拒否し、阿弥陀仏への教虔でひたむきな帰依の意識を強調した限りで西洋のプロテスタンチズムと比較されうる。」

勿論、親鸞とルターの間にはなんのつながりもない。親鸞は、12～13世紀の日本古代末期の動乱と鎌倉仏教叢生の中に生き、ルターは15世紀末のヨーロッパ中世末期に生まれ、その思想をもってこの世界を真二つに引裂く動乱を生みだした。三百年も距った時期、洋の東西を分つ世界の中で、このような相似の信仰＝救済観が生まれた理由はどこにあるのだろうか。

しかも、この相似性は、信仰＝救済観の相似性とどまらなかった。この思想核から生じる諸観念もまことに似たものがった。まず第一に、親鸞は信仰のみによって成仏すると主張するがゆえに、既成仏教の祈祷や加持の一切を否定してしまった。「南無阿弥陀仏」の繰返しによる弥陀への感謝の応答のみを残した。ルターも信仰のみの立場からカトリック教会のあらゆる救済行為や秘蹟救済制度を徹底的に破壊し、意味を完全に転換された洗礼と聖礼典のみを残すことになった。第二に、この信仰原理から、親鸞は僧侶制度を根本から否定してしまった。信仰のみによって成仏しうるのだから、人々を成仏に導くとされた僧侶も必要ないというのである。それゆえ彼は、ヒエラルヒー的に構築された寺院制度を否定し、もはや寺を認めず、そ

親鸞とルター：一向一揆とドイツ農民戦争

倉 塚 平

上述のテーマに取り組むために、特別研究員となり西ドイツ、ハイデンベルク大学に赴いて、神学部ゼーバマ教授と1989年5月より1990年3月末まで共同研究を行った。以下、なぜこのテーマを取上げたかを、ここに報告したい。

の代わりに信仰の同伴者たちが自発的に集まって教え合う場として、「道場」をつくるよう弟子たちに勧めた。

ルターも同じである。法王から発する教会ヒエラルヒーは完全に破砕され、教会は各教区民が下から自ら構成し保持し、そこにおいては、人々に信仰をめざめさせるための聖書に基づく神の言葉の説教が中心となった。

かかる二人の信仰観とそれに基づく諸変革は、それぞれ国における庶民たちの圧倒的支持をうけることになる。親鸞の教えは、東国においてまず武士たちの心を捉え、ついで農民の中に浸透していき、関西においては名組織者蓮如の出現を俟って遼原の火の如く拡がることになる。それとともに真宗信徒たちは、守護大名や戦国大名の弾圧に対して、百年にもわたる巨大な一向一揆を展開することになる。ドイツにおいてもそうである。1517年の95箇条批判から始る宗教改革運動は、都市村落の民衆の心を急速につかみ、ついに8年後にはかの巨大な農民戦争となって爆発するのである。

魂の救いを求める運動は、両国において、ともに巨大な農民戦争へと帰結することになるが、このパターンの相似性は、同時にまた極度に相似な社会構造とそこから発する農民の社会的な解放への要求とを基礎にして生じたものであった。それは村落（及び都市）共同体の完全自治の確立であった。すでにドイツではいたるところで自治都市が成立していたが、南独においては村落も不完全ながら自治権を保持するに至っていた。この時、ルターは、各都市農村共同体は牧師を選任し教義を判定し教会を保持する権利をもつという共同体原理（ゲマインデ・プリンツィプ）を主張した。この教会レベルでの共同体自治は、同じ貨幣の他の側面である政治的自治の確立なくしてありえない。従ってルターの主張は、彼の意図から全く離れ究極的理論的帰結としては都市村落共同体の完全自治を弁証することになったのである。これに答えて、農民たちは、経済的要求の実現もさることながら自治実現のために、あの巨大な農民戦争に立上ることになった。

わが国においても論理は似ている。13～15世紀、いたるところで農民は、領主を抗争しつつ村落共同体を形成していった。多くのところで、この村づくりの中核となったものは、上下のヒエラルヒー的結合を排した同信同朋の信仰共同体たる真宗の道場であった。道場の組織原理はまさしく村共同体の組織原理と等質であり、道場での宗教的レベルでの結合関係を村レベ

ルでの世俗的關係に移しかえることによって村落共同体は形成されるし、この共同体原理を徹底実現せんとするところから、熾烈で大規模な一向一揆が発生してくるのである。

以上のように、「親鸞とルター：一向一揆とドイツ農民戦争」というテーマは、日本とドイツとの封建制の比較研究の恰好のテーマをなしているが、筆者は、類似性、同質性のみでなく、差異性をも強調しようとしている。例えば、親鸞思想における権力観の全称否定的な欠落、弥陀への感謝の応答として、この世でいかに生きるべきかという視点からする世俗生活における論理化契機の弱さ、これらのものは一向一揆における農民の激しいバトスにもかかわらず、全生活の倫理化をはなはだもって不十分にしか行わず、権力の前に堂々としてたじろぐことのない自立的人間像を全体としては生みだすことをせず、弥陀に対する感謝は一揆敗北とともに逆にお上に対する惨めなへりくだりと下落してしまうことになる。ことに問題は、親鸞があれだけ徹底的に排除しようとしたネボチズムが、忽ちその子孫たちによって復活され、血脈の名による家元制度として真宗教団が組伝された点、ドイツ封建制とは、全く異なるアジア的特性を示しているといえよう。これがあの一向一揆を拡大する原因の一つにもなったが、同時に真宗教団を低俗化と腐敗、権威主義等々の病毒にまぶしてしまうことになる。ルター派教会も農民戦争後、民衆的基礎を失い墮落の一途をたどったとはいえ、かくほどになることはなかった。

ライシャワーはかつて日本の近代化は、日本にヨーロッパと同じ封建制があったからだといいい、これが通説になってきたが、同時に日本近代化の特異性も封建制の中に胎胚していることを見落としてはならない。ドイツと日本中世史における二重のパラレリズムを追求しつつ、わが国のそこにおける特異性あるいは、弱さなるものを自己批判的に抉り出すことが本稿の目的の一つをもなしているのである。